

## 現代チベット地域に生きる宗教儀礼の研究

### — 『<sup>ヴァジュラヴィグーラナ ダーラニ</sup>Vajravidāraṇa-dhāraṇī (金剛摧碎陀羅尼)』に基づく地鎮作法について—

【発表者】智山伝法院 常勤研究員：田村 英子

#### ■ 1、はじめに・研究目的と経緯

本研究で扱う『<sup>ヴァジュラヴィグーラナ ダーラニ</sup>Vajravidāraṇa-dhāraṇī (金剛摧碎陀羅尼)』は、チベット大蔵経中に多くの註釈書や儀軌類が収められ、インドにおいて大変重要視されていたと考えられる。また、その註釈者には、シャーンタラクシタ・パドマサンヴァバ・ブツダグフヤなど著名な人物が名を連ねているが、未だに本格的な研究はされていない状態である。本発表者は、修士論文において文献学的な観点から *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* についてまとめ、8世紀頃にはすでにチベット地域において広く流布していたということを示した。その後の研究から *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* が現在でもチベット地域において根強い信仰を集めており、山や川の浄化、いわゆる日本でいうところの地鎮作法や地鎮祭にあたる宗教儀礼を行う際に用いられているということが判明し、より一層研究の必要性を感じている。

以上のことから、本研究では *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* を中心に、地鎮の作法に焦点を絞って、どのようなことを目指して説かれたものか、また、その効力や実際の儀礼での使用方法を明らかにし、最終的に、日本とチベットの宗教儀礼（地鎮作法）の共通事項や相違点を見出すことを目的として研究するものである。

#### ■ 2、テキストの概要

##### 成立年代と文献上の位置

○ 7世紀末～8世紀頃に成立

○ 『プトン仏教史』(Toh 蔵外 5197)・第四章「目録部」⇒所作タントラ\_\_金剛手タントラ (金剛部)

○ ネパールでまとめられたといわれる短い七つの陀羅尼經典集 *Saptavāra*<sup>1</sup> の第二番目を構成

##### 陀羅尼の内容と尊格

金剛手が仏の不可思議な力（加持）を受け、忿怒金剛手となって説いたものとされる。「一切の有情を恐れさせる」、「停止させる」、「惑乱させる」など荒々しい内容が中心となっており、最後に陀羅尼の功德を偈の形で説いている。

日本では全く馴染みのない尊格ではあるが、チベットではよく知られた尊格である。身体の色は、青・緑・青緑・白色などで、右手に羯磨金剛杵、左手に金剛鈴を持つなど、様々な形態が伝えられており、マンダラについても、二十三尊、十五尊、十九尊、九十七尊などの形式があるようである。

#### ■ 3、現代における *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* の実践（チベット高僧からの聞き取り調査を元にして）

2013年5月11日にチャト・リンポチェ師とお会いし、これまで抱えていた問題点について、示唆に富んだお話をお聞きすることができた。ここでの聞き取り調査とそれに関する考察を簡潔に示すと以下の通りとなる。

##### 信仰している地域、または学派・宗派について

○ チベット・ヒマラヤ地域全体

○ 非常に古くから信仰を集め、チベットでは非常に有名な尊格

##### 尊格とその功德について

○ 金剛手の一種

○ 私たちがこれまで積み重ねてきた罪障を「浄化」する力がとても強い尊格

功德については、原典・註釈書・チベット常用經典集でも様々に述べられているが、やはり強調されるのは「浄化」である。

<sup>1</sup> *saptavāra* (1. *Vasudhārānāmāṣṭottaraśataka* 2. *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* 3. *Gaṇapatiḥṛdaya* 4. *Uṣṇīṣavijayādhāraṇī* 5. *Parṇaśabarīdhāraṇī* 6. *Māricīdhāraṇī* 7. *Grahamāṭṛkādhāraṇī*)

どのような場合に儀礼が行われるのか

○山や川など自然環境の浄化、また霊的な障害からくる病気を取り除くのに効果が大きいものとして行われる

○家や寺院などの建設を行う場合は必ず行われる⇒日本における地鎮作法や地鎮祭に相当

**■ 4、*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī*における信仰の背景について**

○自然環境（山・川・大地）に由来する「<sup>ドゥン</sup>gdon」の影響

**■ 5、日本とチベットの宗教儀礼（地鎮作法）の共通事項と相違点**日本における地鎮作法について

○神道の場合⇒地鎮祭：「地主神」

○仏教（特に真言宗）の場合⇒地鎮法・鎮壇法・土公供・鎮宅法・安鎮法・屋堅め

《お寺のお堂や天皇などが住まう宮中に建物を建立する場合》

・基礎工事を行う前に執行—「地鎮法」

・建物を建立している途中で執行—「鎮壇法」

\*これは、お堂などの外装のみが出来上がった時点で執行されるものである。この鎮壇法が執行されてから、床板を敷くなどの内装が施される。

《一般的な住居を建てる場合》

・基礎工事を行う前に執行—「土公供」

・建物を建立した後、その建物の守護を祈願するために執行—「鎮宅法」

\*これは「屋堅め」「家堅め」とも呼ばれる。また、この「鎮宅法」は宮中や将軍家で行われる際には、「安鎮法」と呼ばれる。

このように、執行する時期や場所によって呼称が異なる。執行する場所については、その建物に住む人物の社会的地位によって呼称を異にするわけであるが、儀礼の内容における差異はあまりないようである。

日本における地鎮作法が行われる目的

これらが執行される目的については、神道・仏教共に、その土地の神に土地使用の許可を得るためと、工事を行う際に無事であるようにと祈願するために行われるものである。

まとめ・共通点と相違点

「土地の浄化・鎮め」に関連して、どのような経典が用いられてきたかについて考察すると、チベットにおいては古くから *Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* が重用されてきたことはこれまで述べてきた通りであるが、日本においても「鎮め」全般に対して「陀羅尼」の名をもつ経典が主に用いられていた。特に日本においては、『陀羅尼集経』が重んじられ、「病の鎮め」に対して靈験あらたかであると信仰されていたようである。さらに、*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* と同じく、魔物の影響によってかかる病に効果があると述べられおり、重要な共通事項であると考えられる。

*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* を通して日本とチベットの共通事項を探るとアニミズム的思想を背景として、それぞれの土着の文化と融合しながら「土地の浄化と鎮め」の儀礼が執り行われてきたことがわかった。チベットにおいては *Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* が土地の浄化と鎮めに大変功德があるとして信仰されていると共に、魔物による病気の浄化にも功德があるとされ、非常に多角的に用いられている。一方、日本は真言宗の儀礼にみるように、時期や場所の違いによって呼称が異なるなど、細分化されている。また拠り所とする経典は『陀羅尼集経』であるが、大きな経典であるため、時と場合に応じて様々に使い分けて用いられたようである。このように、日本とチベットの「土地の浄化と鎮め」の儀礼とを比較対照すると、信仰の背景は非常に似通っているが、陀羅尼経典の使い方をみると、チベットにおいては *Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* をオールマイティーに使用し、日本においては『陀羅尼集経』を中心として、その時々によって細分化して用いていたことが明らかとなった。